

令和4年度 学校評価総括表		奈良県立大淀養護学校		No.1		
教育目標		児童生徒一人一人の人格と人権を尊重し、障害の状態や発達段階、生活実態を的確に捉え、「自分の意見や思いを伝え行動し、主体的に生きることができる児童生徒」を育てる。				総合評価
運営方針		創意工夫を凝らした教育活動を展開する中で、一人一人の特性や能力に応じて社会参加と自立に必要な力を養い、健康で心豊かな児童生徒を育成する。				
本年度学校スローガン		「元氣なあいさつ、笑顔いっぱい、一人一人が輝く学校」				B
令和4年度の成果と課題		本年度重点目標		具体的目標		
令和4年度についても、「自分の意見や思いを伝え行動し、主体的に生きることができる児童生徒」の育成をめざし、コロナ対策を継続しながら安全かつ充実した学習活動や学校行事について、各学部や各分掌等と協議を重ねながら取り組んだ。 個々のニーズに応じた自立活動の取組については、各学部で時間の指導や、事例共有に取り組み、充実を図ることができた。引き続き指導について深めていく。 小学部低学年、小学部高学年、中学部、高等部の4つの教育課程の特色化についてそれぞれで検討を進めるなかで、シラバス作成・活用や授業内容の見直し、時間割の検討の必要性など、新たな課題も見つかった。 ICTの活用についても、個々に合わせた内容、活用方法で指導に生かすことができるようになってきている。今後も更なる活用について検討していく。 様々な健康教育の中で食育に関しては、栄養教員と連携しながら各学部に応じた内容や指導方法で取り組んだ。 教員の専門性向上では、外部講師を招いての研究（来校、遠隔）、公開授業研究、校内研修会、災害時の初動対応シミュレーション研修などを行い資質向上に努めた。 地域の方々とのいろいろな活動・授業等でのふれあいを通して、それぞれの教育課程に応じて児童生徒の学びを深めることができた。今後、更に地域の方々との連携を深め、一体となって学びや体験の充実へとつなげていく。	1	個々のニーズに応じた効果的な指導を行うため、多角的な実態把握（発達検査等）を行い、指導内容・指導方法の工夫と改善を進める。	・一人一人の障害の状態や特性に応じた「自立活動」に取り組むため、27項目から必要な項目を選択し、具体的な目標や指導内容、指導場面を設定し、「時間の指導」を行う。ICT機器等を有効に活用し、学習の個性化、双方での学習を進める。 ・教科指導では、発達の視点をもち、知的の各教科の段階を踏まえた目標と内容を設定し、集団での学びを推進するとともに、カリキュラム・マネジメントを進める。	B		
	2	小、中、高のつながりを大切にするとともに、小低、小高、中学部、高等部の4つの教育課程の特色化を図るとともに、12年間を見通して、役割分担をし、積み上げていく。	・高等部は産業科であることを踏まえながら、「職業科」を取り入れ、ねらいを明確化し、実態に応じた具体的な改善を進める。また各学部の目標を達成するため、基礎集団や授業の集団編成の在り方、新生活様式にも対応した行事の改善や工夫を進める。			
	3	キャリア教育や進路指導の充実を図り、コミュニケーション力（挨拶など）や、望ましい職業観を育てる。	・一人一人に応じた、適切で円滑なコミュニケーション力を育てる。 ・各学部でのキャリア教育や進路指導を通して、自己理解を促す。また各ライフステージに応じた機関連携を大切にし、組織力（担任・進路専任・主事・学年主任・学年進路）を活かした進路指導を進める。			
	4	児童生徒が安心して学校生活がおくれるよう、安全の確保に努め、安全教育と防災教育の推進を図る。 健康教育の充実に取り組む。	・防災安全部、生指部、保体部等が密に連携を図る。防災研修等で教職員の危機管理意識を高めたり、地震避難学習等を通して安全学習や安全指導の充実を図る。 ・地域（大淀町）との連携の在り方について、ともに考える。 ・体力等の向上を図るとともに、社会環境や生活環境を背景とする生活習慣の乱れや感染症対策等、様々な健康課題への適切な対応に努める。			
	5	校内研修の活性化を図り、教職員の指導力と授業力の向上を図る。	・子どもが自分で考えたり活動したりするなど、体験型の授業を目指すとともに、指導と評価の一体化（3観点）の視点を大切に、授業改善を行う。 ・学び続ける教員を目指し、校内研修の機会を計画的に実施する。（ハートOJT④、フレッシュ研修、承認研修、ICT活用研修（Meet、オンライン授業））			
	6	南部地域の特別支援教育のセンター的機能を果たすため、訪問相談「つむぎ」を中心に、地域への効果的で適切な支援を行う。	・相談内容やニーズをチームで的確に把握し、win-winの関係性を大切にした訪問相談、オンライン相談等を行う。「小・中のためのオープンスクール」を企画する。 ・校区内の教育委員会、教育支援委員会、幼・小・中学校等と情報を共有し、就学・転入学等の相談を、計画的・組織的に実施する。			
	7	一人一人がお互いを大切な存在として捉えることができるような「つながり」を築きまた深められるよう、豊かな社会性や人間性を育てる。「地域とともにある学校づくり」を推進する。	・社会体験学習や交流及び共同学習、また事業所等との連携（トライアングルプロジェクト）等に取り組み、地域に開かれた教育活動の充実を図る。 ・コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入し、地域と一体となって特色ある学校づくりを進める。 ・子どもたちの可能性を最大限発揮できるよう、児童生徒・ご家族の思いをしっかりと受けとめ、組織として人権意識を高め、人権教育を推進する。			
	8	教育の質の向上を図るためにこそ、勤務時間管理の徹底と勤務時間・健康管理を意識した働き方を推進する。	・学部主事等と連携し、月1～2回の学級担任者会を、年間通して計画的に開催する。主担任は、設定時間内に必要な協議が活発に進められるよう、案件作成と資料の事前配布、「Grade」の効果的運用を行う。 ・各授業ごとに「年間計画表」を作成する。（5月中旬に年間の主な学習内容を立案する。2学期以降の分については、夏休みに見直しを行う）*学習内容配列表の活用→シラバス→「年間計画表」 ・セット時間を厳守できるように、会議時間の設定を行い、計画的な学校運営を進める。（金曜日は大きな会議を入れない、定時退庁日は17:20、その他の日は19:00）*留守番電話と学校携帯電話の運用			
具体的目標		具体的方策・評価指標		自己評価結果	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等
教育課程（教務部）	小低・小高・中・高それぞれが果たす役割とつながりを大切に、12年間を見通しながら各教育課程の特色化を図る。	各教科の位置づけを明確化し、三つの観点を意識した目標設定や評価について検討を進める。見直した内容について実践を深めながら学校全体で共有し、カリキュラム・マネジメントを積極的に推進する。	B	B	個別の指導計画について、三つの柱を意識して目標設定するよう呼びかけるも、各個人の裁量にまかせてしまっている現状がある。目標の立て方を含め、学校全体で共通確認できるように、個別の指導計画マニュアル作成に着手した。小学部・中学部では、積極的にカリキュラム・マネジメントを推進する中で、教科の位置づけや時間割について課題が見えてきた。 高等部では、教材研究の日等を利用して、来年度からの運用に向けて、数学・社会・理科・家庭・美術・音楽のシラバス作成に取り組んだ。 小学部・中学部では、年間計画の充実がシラバスへの第一歩と考え、夏期学部研修にて年度当初に立てた年間計画A表の見直しを行った。小学部では試行段階の「学びの履歴」大淀版を使用し、子ども達の学びを振り返る機会とした。	○三つの柱を意識した目標設定を引き続き研修し、学校全体に発信する。 ○個別の指導計画のマニュアルを運用し、見直しを行う。 ○教科の位置づけの見直しや時間割の変更を学校全体で考えていく。
		高等部は作成したシラバス（国語科）を運用しながら改善を進め、他教科についても作成に着手する。小学部・中学部については高等部のシラバスを参考にしつつ、他県で実践されている「学びの履歴」大淀版の検討を進める。	B		○今年度作成したシラバスの運用を進め、改善に努める。 ○小・中学部では、引き続き年間計画の充実を目指す。大淀版「学びの履歴」の実質的運用を検討する。	
		年間計画A表、振り返りB表が学校全体で活用できるように発信していく。学習内容配列表、シラバス、学びの履歴の内容を整理する。	B		○引き続き年間計画A表、振り返りB表活用定着を目指す。夏休みに見直すようにした。教科会にて振り返りB表を用いることにより、反省が行いやすく、次の授業へと活かしやすくなった。 教育課程の積極的な見直しを行い、学校全体で12年間を見直し、系統立った学習指導	
教育活動（各学部）	一人一人の実態に応じて、指導目標を設定し、指導内容の工夫と改善を行う。	【小】「おはようひろば」での自立活動の指導において、個々の児童の目標や指導内容について学部研究等を活用して小学部の教員間で共通理解をはかり、さらに指導を深められるようにしていく。	B	B	【小】「おはようひろば」の継続的な充実に向けての形作りに取り組み、指導目標や内容について教員間の共通理解ができた。学級では個人差が大きく個々の自立活動のねらいに迫るのが難しい児童においては、ねらいを共有する小集団を3グループ編成し、週1～2回学級を越えて指導を行った。 【中】昨年度、授業内容やねらいを整理したものを教員間で確認しながら授業を進めることができた。	【小】「おはようひろば」において、今年度作り上げた形態を継続しつつ、よりよい仕組みを模索する。更に、個々の自立活動のねらいに迫ることのできるよう学習形態を工夫すると共に、学習内容を充実させる。 【中】各教科の位置づけや授業集団の確認や検討を引き続き行う。
		【中】目標や指導内容を振り返る機会を大切に、教員間で目標やねらいの共通理解をはかり、授業改善や次の指導につなげていくようにする。	B		【高】OTからの助言や、検査の結果を踏まえて、自立活動の目標につなげた事例を、学部会で共有することができた。	【高】引き続き、より多くの事例を共有することで、自立活動の充実を図るようになる。また、ASA旭出社会適応スキル検査など検査結果の有効な活用について検討する。
		【高】実態に応じた自立活動の目標設定と指導場面をより明確にするために、学部内で自立活動の実践内容を共有し、自立活動に対する理解や見識を学部全体で深められるようにする。	A			
	教科等学習効果の最大化を図るため「カリキュラム・マネジメント」に努める。	【小】高学年において、より良い縦割りの学級編制を行うために、A・Bそれぞれのグループの目標を整理し、より客観的な視点で検討できるようにする。	A	B	【小】A・Bそれぞれのグループの目標は指導の目安として捉え直した。高学年の学級編制は太田のステージに加え、S-M社会能力検査の集団参加と自己統制の領域を参考に検討した。特にBの中でも情緒面に配慮が必要な児童をB+として、指導の参考にした。	【小】各教科等を合わせた指導「なかよし」の位置づけや各授業の内容を見直す。
		【中】昨年度、新学習指導要領をもとに授業内容の整理を行ったことを計画出て授業に取り入れ、実践していく。	A		【中】チャレンジタイムの歴史を振り返り、総合的な学習の時間のねらいについて教員間で整理し共通確認できた。他の教科との関連について意見も出しあい、指導に生かすことができた。	【中】各教科で付けた力を発揮できる場や時間になるよう、チーフとサブで連携し進めていく。
		【高】引き続き、各教科のシラバスを作成を目指し、それを基に領域や内容に偏りがないように年間計画を立て、授業を行えるようにする。	B		【高】定期的に検討する機会を持ち、各教科のシラバス作成を進めることができた。今後年間計画立案のため、有効に活用できるようにする。	【高】教科会で有効にシラバスの活用を進め、チーフ及びサブで共有を図り授業の充実につなげられるようにする。
地域に開かれた教育活動を推進し、豊かな社会性と人間性を育む。	【小】地域の人々と触れ合う内容の授業や行事を計画するにあたり、ねらいに沿ってICTや更に他の方法を活用した内容を検討し、実施していく。	B	B	【小】ときめきタイムや交通安全集会等、地域の人々と直接的に触れ合い経験を広げる授業や行事を計画的に実施した。コロナ感染症対策が見直され、2学期から居住地における直接的な交流及び共同学習が可能になり、直接的な交流やオンライン会議システムの活用等、個に応じた交流方法を検討して実施できた。緑ヶ丘小学校との学校間交流はオンライン会議システムを活用して実施した。	【小】地域の人々と触れ合う内容の授業や行事を計画するにあたり、直接的な交流やICT、他の方法を検討し、活動内容の充実を図る。交流及び共同学習においては個に応じた方法で進められるよう計画する。	
	【中】実態に応じてMeet等を取り入れ紹介などを進める。また、生徒の実態に即した社会体験学習ができるよう作品等を介しながら、互いを意識できるように連携を進めていく。	B		【中】手紙や作品の紹介を介して、学校での活動の様子を互いに知ることが大切にした。また、3学期からは居住地校交流を少しずつ進めることができた。	【中】実態に合わせて作品やICTを取り入れ工夫しながら進めていく。また、事前事後学習についても、学部で再度おさえて実践に移せるようにしたい。	
	【高】コロナ禍でも実施できる工夫を講じて、卒業後の社会生活につながる学習をシラバス作成とともに年間計画を立て、実践できるようにする。また、卒業後の進路決定を見据えた情報共有のため家庭や事業所等と連携を密に図る	B		【高】積極的な取組が難しい折ではあるが、実施できる工夫を講じて実践した。各授業の年間計画としてどのような内容がどれだけ立てられているか、確認ができていない。	【高】地域とつながる取組を教科学習や特別活動で、どのように行っているか、情報共有する場を設ける。それらをシラバスの学習内容に反映させる。	
教育環境（総務部）	PTA活動を補佐し、PTAと連携を図る。 教材備品の管理、環境美化、駐車場の管理運営、式典の企画運営を行う。	PTA活動を補佐し、関係行事の調整・計画・立案に協力する。	A	A	3年ぶりのPTA活動を部分的に再開でき、PTA会長や各専門部長と連絡を取りながら部会案内や記録の作成、活動の段取り等を行うことができた。	PTA活動を補佐し、関係行事の調整・計画・立案に協力する。
		・校内の環境について管理し、必要な修理や作業の企画運営を行う。 ・各行事において安全を第一に優先した駐車場の管理運営を行う。	A		教材備品点検の実施と管理、除草作業の企画運営をおこなった。各行事における来校者駐車場所を立案し、当日には安全に留意しながら駐車場運営をおこなった。始業式等の企画立案と当日の運営をおこなった。	必要部署と連携を図り、除草作業当日の負担軽減につなげる。各行事における駐車場所は関係分掌と動線の確認を丁寧に行い、安全な駐車場運営につなげる。教材備品管理や式典の企画運営に関係各所と協力しながら取り組

#NAME?	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価 及び改善方策
生徒指導 (児童生徒指導部)	児童生徒が安心して学校生活を送るための学習や指導の推進を図る。	情報教育部をはじめ他分野との連携を深め、インターネット上での安全教育を充実させる。常に児童生徒の課題や実態の把握と理解に努め、全体指導と個別の指導を充実させる。	A	情報教育部と連携し、児童生徒の課題に即した内容を検討しながらスマホマナー学習などを実施した。個々の児童生徒に対し「聞き取りシート」を活用しながら実態把握をする、個々に合わせた指導することができた。	個々の実態把握をさらに進め、懸念されるトラブルなどを積極的に予測することで一人一人にあった学習や指導を提供できるよう工夫する。	〈関係機関との連携〉 療育や福祉との連携で、ねらいに対して今こまでできているのか等共有ができたらありがたい。
		「生徒心得」をはじめ、ルールやマナーについての学習に加えて、自身や他者についての理解を深める指導をすすめることで、安心して活動できる集団づくりを行う。	A			
	一人一人が主体的に学校生活を送り、自分の役割が担える自治活動を推進する。	B A	児童生徒会役員等による挨拶運動や体育大会のスローガングづくり、昼休み集会など、多くの児童生徒が自主的に参加し主体的に取り組むことができた。			
進路指導 (進路指導部)	本人・保護者の願いを聞き取ったうえで、担任が中心となり、各ライフステージに応じた関係機関等と連携し、適切なキャリア教育と進路指導の充実を図る。	【小】ICT機器を利用して、地域の人的・物的資源を活用した学習に取り組み、様々な人々との関わりを広げる。	A	コロナ感染症対策の緩和に伴い、お話の会や警察署員に来校や梨狩りやオークワに買い物に行けて、いろいろな地域の方と関わりがもつことができた。	コロナ感染症の状況をみながら積極的に校外学習や地域の方との関わりを広げていきたい。難しい場合は、ICT機器の活用を考えていく。	〈関係機関との連携〉 療育や福祉との連携で、ねらいに対して今こまでできているのか等共有ができたらありがたい。
		【中】「働く」とは何かを考えるとともに、意識をもって現場体験学習や職場体験学習などの進路学習に取り組む。	A	現場体験学習は、1学期に3年生が半日、2学期に1～5組の3年生が1日、2年生は半日実施した。職場体験学習は678組が一日、梨農家水園で実施した。	生徒に対して働くという意識付けはできた。今後は、進路指導の目標を基に実施内容や方法について検討していく。	
	【高】進路学習の年間計画は、HR委員会とも検討し、積み重ねのある進路指導ができるよう、よりよい年間計画と学習内容の充実をはかる。実習日誌の活用は、日々の指導にも生かせるよう担任や各教科での連携方法を作業担当者で再度検討する。共通理解内容は、進路部で精査する。	A	実習日誌の活用は、作業チームと担任が、現場実習の成果と課題を共有し連携しながら進路指導をすすめるよう学部研修を主催し、研修アンケートをもとに連携方法を検討した。	現場実習の成果と課題を担任から、作業チームや各教科担当と共有するため実習日誌の形式を改善する。また実習日誌を必ず回覧し、共有内容により担任が説明を加えることにする。		
一人一人の社会参加と自立を目指し、各地域との関係機関との連携を深める。	B	自立支援協議会等を活用し、学校・家庭・各市町村等の関係機関が共通の課題を意識し、解決に向けて連携する。コロナ禍でも開催できる学校見学会、地域別タウンミーティングの方法を検討し、各市町村、福祉事業所の方に学校での取組や子どもたちの様子を知ってもらう。またICT等を活用して、実施内容や様子等を情報提供する。	自立支援協議会へ参加し、地域性や課題を各支援機関と情報共有を行い、個別のケースに柔軟に対応することができた。学校見学会では、本校の概要と生徒の様子を見てもらった。地域別タウンミーティングでは、地域毎で内容の広がりや違いがあり、生徒を中心に内容で話をすすめることが難しくなった。	関係機関との連携や会議等への参加は積極的に進め、顔の見える関係を今後も続けていく必要がある。学校行事に関しては、感染症対策として人数・時間制限等、今後の検討を基に設定する。ホームページへの掲載に向けて、情報教育部と連携を図る。		
校内支援・ 地域支援 (支援教育部)	個々のニーズに応じた指導と必要な支援を行うためのアセスメント力の向上を図る。	保護者の願いや目指す自立の姿を具体的に計画実施できる個別的教育支援計画作成を目指す。 検査結果を活かした多角的な実態把握ができるようにする。自立活動の時間の指導に向けて校内のニーズを把握し自立活動を充実させる。	B	マニュアルを使用し、随時、学部で説明を行いながら個別的教育支援計画の作成に努めた。「目指したい自立の姿」から「今年度の方針」「具体的な支援」までのつながりを意識した計画が作成できた。必須検査等の検査結果を活かす研修を行い、実態把握と課題設定をする事例研修ができた。また、専門家のアドバイスを情報共有し、新たな視点に気づくことができた。	保護者とともによりよい個別的教育支援計画を作成する。 検査結果や専門家の意見、行動観察などから多角的に実態把握し、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導や支援を実施できるようにする。	〈センター的機能〉 今後も引き続き地域への支援を続けて行ってほしい。
	特別支援教育コーディネーター指導者を中心に、教育相談・訪問相談を行い、地域支援を推進する。	校内チームで相談内容やニーズを把握し、オンラインを活用したタイミングを逃さない教育相談を進める。小中学校の先生のためのオープンスクールを企画し、特別支援学校の授業見学の機会を設ける。	A	リフレ会議や分掌部会で、情報共有や多角的な意見を出し合いながらチームとして相談に対応できた。また、オンラインを中心に訪問での観察等と組み合わせ、タイミングを逃さず教育相談を進めることができた。オープンスクールは2期にわたり実施することができた。ニーズに応じた授業の見学や見学後のMEETで互いの学校の情報交換をすることができた。	オンラインを活用した実践ヒント交流会や教育相談、オープンスクールなどを実施し、小中学校の先生方への支援や情報提供を充実させる。センター的機能をより活用いただけるように発信していく。	
	関係機関が連携し、適切な就学・入学を推進する。	感染症予防を講じながら複数で対応し、適切な就学入学相談の実施と年齢に応じた実態把握ができるよう改善と工夫に努める。市町村教育支援委員会と適切な就学・転入学に向けて連携を図る。	B	学部を超えて教育相談配慮時間を用いて複数体制で実態把握することができた。一部の町村とはできていないが、市町村教育支援委員会と連携することができた。	適切な就学入学相談の実施と年齢に応じた実態把握ができるよう複数体制で今後も改善と工夫に努める。 市町村教育支援委員会と適切な就学転入学に向けて連携する。	
研究・研修 (研究部)	社会の変化に対応した教育的ニーズを捉え、学部間の理解と連携を大切に、教育力の向上に取り組む。	学校統一テーマ「しあわせに生きる力を育む」に基づいて、課題やニーズに応じたテーマを各学部で設定する。「研究の日」では学部の研究推進委員がテーマに沿った研究計画・内容を考え、それを基に、学部全体で研究を深めていく。研究紀要の作成や報告会を設定し、学部間での共通理解を図る。	B	学部ごとに各学部の課題やニーズに沿った研究テーマを設定し、研究を進めることができた。分かりやすい研究内容を心がけ、話し合いは適宜、グループに分けて行うことにより、活発な意見交流ができ、教員の主体的な参加を促すことができた。また、研究内容の成果や課題について共有することができた。	今年度の学部研究での成果や学びの共通理解を図り、授業の実践に取り組む。研究活動を実施し、教育力の向上を目指して学部の課題解決を図る。その中で教員が主体的に研究活動に参加できるように研究課題や方法を工夫しながら推進する。	〈交流及び共同学習〉 いろいろな形での交流（直接、Meet,作品交流等）があり、良かった。事前の課題共有が大切。
	授業研究や研修の充実を図り、授業力や指導力を向上させる。	外部の助言者を招聘し、公開授業研究を行う。研究討議は、課題解決に向けて意見交流を大切にしながら進める。討議後はまとめを作成し、教員全員で学びを共有できるようにする。 夏期教員研修、自主研修、ワークショップ等を学校の課題やニーズに応じて計画を立てて実施する。	B A	授業への思いや意図の共有を図りながら意見交流を進めることができた。課題解決や授業力向上に向けた視点をもち、研究討議を計画、設定することができた。 夏期・冬期教員研修、ワークショップなどを行った。夏期教員研修の学びを日々の実践につなげられるよう、全体研究の日を活用し、取り組むことができた。	課題解決に向けた討議の柱を熟考し、研究討議を行う。公開授業研究のまとめを作成し、全教員で共有することで、授業力や指導力の向上を図る。 体制整備事業の活用を視野に入れながら、課題やニーズに応じた研修の充実を図る。研修後、得た学びを共有したり深めたりできるよう工夫する。	
	人権教育の取組と研修等、充実を図る。	人権教育に関するねらいを各学部の実践に活かす取組を充実させる。毎月発行する「大淀ほっと通信」の内容を充実させるとともに、児童生徒と教員がともに人権に関する学習を深める機会を設ける。人権や道徳に関する資料等の提供を充実させる。	B	4つの教育課程に合わせて、小学部低学年・高学年の人権教育のねらい(案)を作成した。こころしじめのアンケートを実施し、結果から生徒の悩みを読み取った。大淀ほっと通信の発行と人権標語の放送を行い、人権について考える機会とした。研修資料は小学部廊下に掲示した。	人権学習年間計画の内容を検討し、取り組みを充実させる。アンケートに關して、タブレット入力が難しい児童生徒の願いや悩みを聞き取る。大淀ほっと通信の発行を継続し、人権意識の向上に努める。研修のアナウンス、資料の掲示、回覧を行う。	
健康教育 (保健体育部)	児童生徒の健康・安全に関する校内体制の充実を図る。	健診の実施について、会場の設営や児童生徒へのアプローチの仕方について再度検討し、よりよい環境の中で健診を受けることができるようにする。 医療的ケアが必要な児童生徒の情報共有し、発作やアレルギー（エビペン）対応について研修を行い、起こりうる事態に対応できるように準備する。	A B	担任や保健係の教員と連携し、事前に情報を交換して実施。健診順序の調整や教室を訪問しての実施など工夫を講じたことで比較的スムーズに実施できた。一部の健診で時間の延長が生じたことが次年度への課題。 発作対応研修は各学部で、アレルギー対応（エビペン）研修は外部講師を招いて実施し、教職員の共通認識を深めることができた。緊急時の迅速な判断と行動ができるツールとしてアクションカードを作成した。	児童生徒の実態をより的確に把握し、学校医とも連携して円滑な実施に努める。 アクションカードの運用方法についての検討と研修を行う。	〈アレルギー対応〉 アレルギー対応等、しっかりと取り組まれている。 アクションカードについても活用して行ってほしい。
	円滑な行事運営と、安全に関する環境整備を行う。	体育的行事の内容の見直しを行い、新型コロナウイルス感染症対策を講じながら児童生徒にとってよりよい環境の中で実施できるよう検討する。 体育館や運動場、プールの施設・設備の使用に対する安全確認、配慮を徹底して取り組む。（備品点検や環境美化安全点検の徹底）	A B	うんどうかい・体育大会とともに、新型コロナウイルス感染症対策から密を避ける種目の検討や保護者の人数制限を行った。障害者スポーツ大会では教師引率の元、保護者2名の応援も可能になり、頑張りを見せる良い機 体育備品の管理と修繕、経年劣化している備品の買い換えなどを行った。	新型コロナウイルス感染症の規制緩和に伴った体育行事の形を検討し、よりよい活動を目指す。 今後も老朽化している設備・備品についての把握と安全な利用に向けての点検を行う。	
	教職員のICT活用能力向上をはかり、業務や教育で活用できるようにする。	他分野と連携して教育活動や仕事の効率化を目指す。 情報機器端末を活用して会議等を柔軟に行える環境を構築する。	B B	進路関係の説明会の動画をYouTubeで配信したり、行事のパンフレットを学校HPに掲載したりなど、欠席者等への柔軟な対応ができた。 GoogleDriveの共有ドライブを活用し始めて、資料閲覧も場所を問わず行えるようになった。写真等のデータの扱い方については検討する必要がある。	コロナ禍をきっかけに、ICT機器を活用して新しい学校運営ができているので、継続してよりよい方法を検討していく。 写真等のデータの中で、授業や業務で使用する頻度が多いものを限定してアップして管理する。	
児童生徒のICT活用を進める。	chromebookやgoogle workspace for educationを教育活動に活かす。		B	情報機器端末が充実してきたこともあり、使用する頻度も増え、活用方法についても少しずつ浸透してきている。	学校内で授業を通しての活用実践は積み重なってきているが、学校と家庭間でのやりとりをより進めているように取り組む。	
	ふれあいまつりではコロナ禍での状況を踏まえながら、小・中・高の3学部でのふれあいの場と保護者の参観の機会という2点を大切にしながら企画・運営する。	おはなし広場では四季を感じたり、大淀養護学校アート展では作品の良さに触れたり楽しめたりする行事を企画・運営する。 児童生徒の作品の校内掲示の充実、また作品展を通して児童生徒の美術活動を地域に発信する。	A B B	感染症対策を講じながら、3学部でのふれあい、保護者の参観という2点を踏まえて実施できた。 おはなし広場は日程を延期しながらも、年間2回実施。アート展はピタゴラ装置など触れて楽しめる様子もあった。 作品展に関しては、声をかけると制作に励む児童生徒もおり、昨年より幅広い出展となった。出展作品を中心に校内掲示も充実させた。	今年度の反省を生かし、出店場所や出店時間等を検討し、よりよいふれあいまつりになるよう検討する。 来年度からはおはなし広場に加え、文化鑑賞会も実施し、より文化に触れる機会を保障していく。 引き続き積極的に声をかけ、児童生徒の作品展を促し、地域へ発信できるようにする。	
	安全な環境づくりに取り組み、安全教育を推進する。	校内の安全点検を実施し必要な備えをする。全校児童生徒対象の避難訓練、防災の日（集会）の実施、児童生徒指導部と協働し単独通学生対象の安全教室を実施する。	B	全児童生徒対象に地震火災避難、火災避難訓練（事前予告無し）、防災集会の実施に加え、単通生安全教室にて災害時の対応について指導、防災への意識を高めた。避難訓練後、避難時の様子について消防士に確認に行き情報を共有したいいろんなシチュエーションを想定した避難訓練を模索す	・クラスとは異なる集団での避難、授業中の訓練を計画する。実態に応じた指導を行うため各学部と連携を図る。 ・日常より意識し、危険箇所を確認する。	
防災教育 (防災安全部)	児童生徒の安全を第1に考えて行動できるように徹底する。	昨年度の防災研修の反省を踏まえ、災害対応のシミュレーションを行う。情報提供を行う機会をもち、教員の防災に対する知識の向上を図る。地域との連携を考察する。	B	防災研修では、アクションカードを使用して新たな捜索用のグッズを活用した。基本の動きに加え、捜索体制含む、様々なケースを想定しておく必要性を感じた。職員会議にて、PP等で震災の情報や災害時役立つ情報を共有した。	・部内での係の連携を重点的に検討し、よりスムーズに対応できるように実践していく。 ・部員、教員の防災知識向上を図る（チャットメール活用含む）	